球磨村立球磨清流学園　一体型校舎建設に関する提言書

１ 提言の背景

令和２年７月豪雨という未曾有の災害を乗り越え、球磨村が歩む「創造的復興」の中心的なシンボルとなるのが、村唯一の学校義務教育学校「球磨清流学園」の新校舎建設であると考えます。本提言は、被災した施設の単なる復旧（原状回復）ではなく、村の未来を切り拓く「未来の教育」を提示するための羅針盤です。

現校舎は土砂災害のリスクと浸水リスクを併せもつ懸念区域に位置しています。また、現校舎と南体育館は距離が離れており、災害発生時の避難住民への食事を提供する際の調理及び食事の対応等に支障があることが考えられます。以上のことを鑑み、新校舎は、地盤が約３メートル高く、南体育館と隣接する南グラウンド周辺に建設します。

また、村の財政状況を踏まえると、校舎面積については、令和７年度における校舎建築工事費を参考にした坪単価で算定した場合、当初想定した事業費から仮定すると、全体面積は約５０００㎡程度となるため必要な教室等や共用部分を効率よく配置する必要があります。

球磨村の創造的復興のシンボルとなる義務教育学校ならではの「一体型校舎」を建設するにあたり、以下の基本理念を定義します。

２ 提言の基本理念

（１）「変革できる力」を身に付け、球磨村の未来を創造する子供たちを育む教育拠点

球磨村の未来を担う子供たちが、よりよい社会を目指して、責任をもって社会に参画し、社会を変革する力を身に付けるとともに、「幸せ」を実感できる環境を提供し、球磨村の未来を創造できる人材を育成するための象徴として本校舎を位置付けます。

（２）３ステージ制に対応した空間のスケールデザイン

発達段階に応じた「１−４年（ファーストステージ）」「５−７年（セカンドステージ）」「８−９年（サードステージ）」の３ステージ制を軸とし、単なる学年区分に留まらず、低学年の「のびのび」とした空間から、上級生の「じっくり」とした専門性の高い空間へと変化することを目指します。

（３）１年生から９年生まで、子供たち全員が学校を創る主人公となる

吹き抜けや広々とした空間を活用し、下級生が上級生の活動に触れて「憧れ」を抱き上級生と下級生が「互いに関わり合い・支え合う」ことのできる視線計画を組み込みます。これは、一体型校舎において日常的な異学年交流を促進するための重要な環境設計と捉えています。これにより、１年生から９年生が共に学び合うことのできる義務教育学校ならではの学びの空間が生まれ、低学年も含めた子供たち全員が主体的に意見をもち、共に社会を構築する場としての学校となることを目指します。

３ 一体型校舎整備に係る検討結果

３－１ 南校舎側における新校舎建設場所の検討及び教室配置、設備仕様等の整備

（１）新校舎建設場所

南グラウンド

（２）構造

①校舎の材質

木造２階建てとし、熊本県産材をふんだんに活用することで、地産地消と温かみのある学び舎を実現します。

②立体的接続

１階と２階を吹き抜け及び大階段で接続し、全校生徒が集う発表エリアとしての機能を持もたせるとともに、子供たちが溜まれる「居場所」となります。
ただし、吹き抜け構造は冬の寒さや夏の暑さが課題となるため、「高断熱化及び気流制御による空調効率の確保」を不可欠な必須条件とします。

（３）施設構成及び諸室一覧（イメージ案）

フロア構成の面積データに基づき、主要諸室を以下の通り構成します。

フロア	主要諸室名	配置の意図・仕様留意点
１階	普通教室（１-４年）＋ＨＢ	ファーストステージ、各室ＨＢを包含
	特別支援学級教室（知的学級、自情学級）	プライバシーを確保した静音エリア
	コモンスペース（結び目）	ステージ境界の交流拠点
	管理諸室（事務室・校長室等）	玄関とグラウンド双方を見渡せる配置
	保健室（多目的トイレ、シャワー室併設）	グラウンドに面して配置
	メディアセンター（１Ｆ）	校舎中心部 ２階と吹き抜けで接続
	ランチルーム	隣接して、家庭科調理室、給食調理室を配置
	普通教室数４室・特別支援教室２室・コモン（共有）スペース１室・メディアセンター１室・管理諸室４室・保健室１室・ランチルーム１室	
２階	普通教室（５-９年）＋ＨＢ	教科センター方式に対応 各室ＨＢ
	コモンスペース（結び目）	ステージ境界の交流拠点 ８-９年は棚田学教室を利用
	棚田学教室（３rd ステージコモンスペースを兼ねる）	東側、棚田の景観を学習に取り込む「借景」仕様
	職員室	グラウンドを見渡せる配置
	理科室（第１・第２）	準備室を含む専門教室ユニット
	特別教室（美術・音楽・技術）	セカンド・サードステージが主に活用

フロア	主要諸室名	配置の意図・仕様留意点
２階	特別支援教室、通級指導教室 相談室	プライバシーを確保した静音エリア
	災害用備蓄倉庫	搬入路に面して配置
	多目的スペース	和室
	普通教室数５室・特別支援教室２室・通級指導教室１室・相談室１室・図書室、コモン（共有）スペース１室・棚田学教室１室・職員室１室・理科室２室・特別教室３室・災害用備蓄倉庫１室・多目的スペース１室	

（４）建物性能と維持管理

①最適な空調環境

オープンスペースの弱点である冬期の寒さ対策として、高断熱・高気密仕様及び放射空調の検討を行い、快適な学習環境と光熱費抑制を両立します。

②セキュリティ

来校者窓口を事務室付近の１箇所に集約し、事務室からグラウンド・玄関の両方を一望できる配置にします。

３－２ まちづくりと連動した学校施設の活用

（１）地域開放スペース

①避難所機能と動線設計

ランチルーム、給食室、調理室、災害備蓄倉庫を連動させ、災害時の炊き出し拠点として機能させます。南体育館（第２次避難所）へは現テニスコートと同レベルでの渡り廊下で接続を行い、車椅子利用者や物資搬送の利用しやすさを確保します。

また、最低７２時間の電源確保のための自家発電機、かまどベンチ等炊き出しスペース、支援物資搬入のため駐車場スペースの確保等、有事を想定し防災拠点機能を充実させます。

建設地の南グラウンド周辺は、現校舎から地盤高３メートルの差があることから、浸水リスクを物理的に回避し子供たちの命を守るとともに、既存の施設を有効活用して、災害に備えるためのものとして機能させることができます。

（２）防災機能

①防災拠点機能と教育環境の両立

新校舎は、災害時に地域住民の命を守る拠点としての機能をもたせ、「いつも（平時）」と「もしも（災害時）」の双方に対応する、柔軟性のある設計とします。

②多用途ヘリコプター（UH-60JA 等）対応ヘリポートの確保

南グラウンドにおいて、50m×50m のフラットな離発着スペースを確保します。訓練及び緊急時の安全性確保のため、障害となる高い樹木やナイター設備を撤去し、照明は校舎壁面または周辺に設置します。

③ソーラーパネルと非常用電源の設置

ソーラーパネルを設置し、再生可能エネルギーの活用により、維持管理コストを抑制します。停電時にも稼働する非常用電源を設置し、災害時の避難拠点としての機能を維持することで、地域の安全・安心を支えます。

（３）交流拠点

①郷土教育の象徴「棚田学教室」の設置

探究的に学ぶ「棚田学」を学びの柱とし、地域と共にある学校を目指しています。球磨村独自の景観や自然環境を享受できる専用室として「棚田学教室」を設置し、９年間の連続した学びを支える拠点とします。

３－３ 主体的・対話的で深い学びを誘発するデザイン

（１）ワークスペース・オープンスペース・ホームベース（ＨＢ）と普通教室の確保

普通教室に隣接し、個人の居場所やロッカー、少人数学習を支える共用スペースである「ホームベース（ＨＢ）」を各クラスに配置します。これにより、教室内の密度をオープンスペースとして拡充し、最適化することでワークスペースとして確保します。このことで、個別学習と集団学習の途切れのない学びを可能にして、支援が必要な子供たちも安心して学ぶことができる環境を生み出します。

３－４ ＩＣＴ利活用に資する学習空間の在り方

（１）教室配置

①次世代型学習環境の構築（教育的ビジョン）

校舎は、最新のＩＣＴ技術と物理的な空間が高度に融合した、次世代型の学びの場として設計します。従来の「一斉授業スタイル」から、児童生徒が自ら場所と方法を選択する「探究型学習スタイル」を支える基盤を構築します。

②次世代型メディアセンター（知の広場）

図書室を「本を借りる場所」から「情報を使いこなし対話する創造拠点」へと進化させ、校舎中心部（Ｔ字型の中央）に配置します。

ア）ＩＣＴによる創造活動

動画編集や３Ｄプリンター等のデジタル創作活動を支えるハブ機能を持もたせます。

イ）学びを進める共有空間（学び合いの場）

可変的な家具（ソファ席等）と６０インチ級タッチパネル式電子黒板を備えた環境で協働学習を実現します。

③教科センター方式の充実

子供たちが固定の教室にいるのではなく、時間割に合わせて各教科専用の教室（特別教室等）へ移動して授業を受けるようにすることで、より主体的な学びを創造できるようにします。「棚田学教室」や「メディアセンター」との連動により、フロア全体を通して学びが交差する「探究の拠点」としても定義することができます。これにより、教科に特化した環境で授業が行われることで、専門的な深い学びが得られるとともに、時間割を意識して自分で移動・準備することで、子供たちの自立心が育ちます。

（２）通信インフラ

①ラーニングストリート（廊下を探究の場に）

廊下を単なる通路から、学びを共有する空間（コモンスペース）へと転換します。教室との境界には「スライディングウォール（可動式の間仕切り）」を採用し、壁面ホワイトボードや全域Ｗｉ−Ｆｉを完備することで、学年を超えた活動が「見える化」される動線を設計します。

（３）メディアセンターの機能等

①1 人集中カウンター

窓際に個別最適化された深い学びに没頭できるスペースを確保します。また、校舎中心部に２階と吹き抜けでメディアセンターを位置付けます。

３－５ 村の財政状況を踏まえた校舎面積

（１）将来の複式学級化と持続可能性（柔軟な建物構造）

数十年にわたる運用を見据え、人口減少等の社会状況の変化に対応できる柔軟な設計を採用します。「建物の骨組み」と「部屋の中身」を分けて作り、数十年後のニーズに合わせて内装を容易に変更できる仕組みを導入します。

①直間方式授業への対応

人口減少を見据え、1 教室で 2 学年が同時に授業を受けられるよう、黒板を複数設置したり、可動壁により教室を統合したり、ホームベース（ＨＢ）の撤去により２学年の教室が行き来できたりするなど、教卓や収納の配置に柔軟性をもたせる設計とします。

②構造的柔軟性の確保

様々な子供たちの多様なニーズに対応するため、必要に応じて学びを共有する空間（コモンスペース）の一角を個別学習の場へ転用できたり、将来的な減築や社会教育施設への転用時に容易に組み替えられたりするなど、柔軟性のある構造とします。

３－６ その他、新校舎の魅力向上に関すること

球磨村が誇る棚田や、そこに関わる地域住民の最大限の協力を得て、体験を通じて、相互の協力、協調性、探究心等を養うとともに、鳥獣対策等「本物」を学べる場とします。東側に位置する芋川のせせらぎや、四季折々の棚田の風景を教室から直接眺められるよう配置を工夫します。地域の自然を「借景」として取り込み、景観そのものを生きた教材とします。

３－７ 球磨村の未来を創る「あるもの探し」の教育

本委員会において一貫して共有してきたものは、「ないものねだりではなく、村にある宝（自然・歴史・人）を再発見する『あるもの探し』」です。この新校舎建設プロジェクト自体が、その考え方を体現したものです。

球磨清流学園は、地方にいても都市部以上の学力向上や生きる力を学んだり、不登校支援や多様な学びの場として、全国でも類を見ない教育拠点となり得ます。子供たちが「球磨村に生まれてよかった。」と確信し、村外からも「ここで学びたい」と子供が集まってくる希望の拠点としてある学校づくりに努めます。